

定点観測◎拡大版

沖縄——辺野古、与那国への自衛隊、教科書 島尻まーじ

気がつくくと晩秋なのに暑い日が続いたり、修学旅行真っ盛りシーズンなのにスクールが続いて、青い海・青い空の沖縄は台無し。先頃は震度4という、沖縄にしては大きな揺れに驚き二〇一一年は穏やかに暮れそうもない。

年末に向けてデッドヒートを繰り返しているのが名護辺野古への基地建設に係る環境影響評価書の提出問題。オール沖縄と言われるように県議会も国会議員もアセス断念と手続の中止を求めている。野田首相がオバマ大統領には年内提出方針を伝えたそうだが国会では、「基地を新たに造る場合は強権的に進めるべきでない。仮に建設する場合は地域の理解を得なければならぬ」と答弁するから、一川防衛相は、あくまで年内提出だと頑張りざるを得ない。

沖縄防衛局の田中聡局長は、九州・沖縄防衛議員連盟連絡協議会で、辺野古地区が二〇一〇年五月に補償の拡充条件で移設容認決議をしたことをあげ、「地元中の地元は反対していない、知事の言う地元は名護市だ」と指摘。「区が戦後、米軍による土地の賃貸借契約に応じた事実を重く受けとめるべき」と言った。かつて日米両政府が安保機能を損なわずに「独立国日本」を装うため「本土」から海兵隊を沖縄へ押し込め、キャンプ・シュワブが造られた歴史を知るならなおさら、もう一つ基地を造ろうなど許されないことだ。地元住民に無力感を与え容認に追い込む手法も同様。（田中防衛局長は、「犯す前に……」発言で、一月二九日更迭された——編集部注）

辺野古ではこのところ区行政委がテント村の撤去を迫るなどキツイ状況にあるが、市民団体により「アメリカへ米軍基地に苦しむ沖縄の声を届ける会」が結成され二〇一二年一月下旬の訪米が計画されている。普天間飛行場の国外移設を米政府や議会、市民に訴えるために。現在、名護市を初め嘉手納・北谷・沖縄・宜野湾の各首長らの参加を要請している。

前々から浮上しては消え、消えては浮上していた与那国町への陸自配備計画が尖閣問題などを材料にして形を整えてきた。概算一五億円で二年度末までに島南西部の町有地を取得、一五年度までに配備完了というも。沿岸監視施設と駐屯地を久部良地区や島中央のインビ岳に配置するそう。〇九年の町長選挙で民意は示されたとして与党多数の「議会制民主主義」で乗り切ろうとする誘致派に対して、住民たちは賛成派を上回る五五六名の署名を突きつける。一月一七日に防衛省と町が強行した町民への説明会では「民意を問え」の声が相次ぎ住民投票の開催が求められた。「島が大変なことになっているときに未来を作る自分たちも何とかしたい」と中学生が自発的に始めた署名用紙を校長が無断で取り上げるなどの事態も起きて、大人も子どもも「民主主義と人権」を学び実践する場となっている。

与那国島の自衛隊誘致派と並んで尖閣諸島領土化に熱心な石垣島の中山市政をバックに両教育委が中学生の「公民」教科書に育鵬社版の採択を押し通そうとしている。後押しをする文科省は東京書籍版を採択した竹富町には無償給付しないと脅しをかけている。九月八日に一本化への解決を求めて開かれた八重山全教育委員協議会の決定（東京書籍版）を認めさせる県民集会在、一月二三日、嘉手納文化センターで開かれた。快晴の下、千名が参加。

石垣市から住民の会の藤井さんは、「文科大臣発言で全国問題として浮上、大人が民主主義を生かせるか、子どもたちが見ている。どうしても負けられない」と表明。竹富町の中村さんは、「離島の多い中で、西表に八〇名が集まり決議した。戦争賛美の教科書を子どもに渡してはいけない」と発言、石垣市のベテラン教師の上原さんは、「何度も読んだが、これでは教えられないと思う」と語った。歴史から学ぼうとしない勢力が再び沖縄を南の守りに就かせようとしている。（しまじり・まーじ）